

雁の童子

宮沢賢治



青空文庫

雁の童子

宮沢賢治



流沙るさの南みなみの、楊やなぎで囲かこまれた小さな泉いずみで、私は、いつた麦粉むぎこを水みづにといいて、昼ひるの食事しょくじをしております。

そのとき、一人ひとりの巡礼じゆんれいのおじいさんが、やつぱり食事しょくじのために、そこへやって来きました。私わたしたちはだまつて軽かるく礼れいをしました。

けれども、半日はんじつまるつきり人ひとにも出で会あわないそんな旅たびでしたから、私わたしは食事しょくじがすんでも、すぐすぐに泉いずみとその年とし老らった巡礼じゆんれいとから、別わかれてしまいたくはありませんでした。

私わたしはしばらくその老人ろうじんの、高い咽喉のどぼとけ仏ぶつのぎくぎく動うご

くのを、見るともなしに見ていました。何か話し掛けたいと思いましたが、どうもあんまり向うが寂かなので、私は少しきゆうくつにも思いました。

雁の童子

けれども、ふと私は泉のうしろに、小さな祠のあるのを見付けました。それは大へん小さくて、地理学者や探険家ならばちよつと標本に持つて行けそうなものではありましたがまだ全くあたらしく黄いろと赤のペンキさえ塗られていかにも異様に思われ、その前には、粗末ながら一本の幡も立っていました。

私は老人が、もう食事も終りそうなのを見てたずね

ました。

「失礼しつれいですがあのお堂どうはどなたをおまつりしたのですか。」

その老人も、たしかに何か、私に話しかけたくていたのです。だまって二、三度どうなずきながら、そのたべものをのみ下して、低ひくく言いました。

「……童子どうじのです。」

「童子どうじつてどう云いう方かたですか。」

「雁かりの童子どうじと仰おほつしやるのは。」老人は食器しょくきをしまい、屈かがんで泉いずみの水みづをすくい、きれいに口をそそいでからま

た云いました。

「雁の童子と仰つしやるのは、まるでこの頃あつた昔ばなしのようなのです。この地方にこのごろ降りられました天童子だということです。このお堂はこのごろ流沙の向う側にも、あちこち建つております。」

「天のこどもが、降りたのですか。罪があつて天から流されたのですか。」

「さあ、よくわかりませんが、よくこの辺でそう申します。多分そうでございましょう。」

「いかがでしょう、聞かせて下さいませんか。お急ぎ

でさえなかつたら。」

「いいえ、急ぎはいたしません。私の聴きいただけお話
いたしましょう。」

沙車さしやに、須利耶圭すりやけいという人がございました。名門めいもんで
はございましたが、おちぶれて奥おくさまと二人、
ご自分は昔むかしからの写経しゃきょうをなさり、奥さまは機はたを織おつて、
しずかにくらしていられました。

ある明方あけがた、須利耶さまが鉄砲てつぱうをもったご自分の従弟いとこ
のかたとご一緒いっしょに、野原を歩いていられました。地面じめん
はごく麗うるわしい青い石で、空がぼうつと白く見え、雪

もま近ちかでございました。

須利耶さまがお従弟さまに仰おほつしやるには、お前もさような慰なぐさみの殺生せつしようを、もういい加減かげんやめたらどうだと、斯こうでございました。

雁の童子

ところが従弟の方が、まるですげなく、やめられな
いと、ご返事へんじです。

（お前はすいぶんむごいやつだ、お前の傷いためたり殺ころしたりするものが、一体どんなものだかわかっているか、どんなものでもいのちは悲かなしいものなのだぞ。）と、
須利耶さまは重かさねておさとしになりました。

（そうかもしれないよ。けれどもそうでないかもしれない。そうだとすればおれは一層おもしろいのだ、まあそんな下らない話はやめろ、そんなことは昔の坊主どもの言うこつた、見ろ、向うを雁が行くだろう、おれは仕止めて見せる。）と従弟のかたは鉄砲を構えて、走つて見えなくなりました。

須利耶さまは、その大きな黒い雁の列を、じつと眺めて立たれました。

そのとき俄かに向うから、黒い尖った弾丸が昇つて、まっ先きの雁の胸を射ました。

雁は二、三べん揺らぎました。見る見るからだに火が燃え出し、世にも悲しく叫びながら、落ちて参ったのでございます。

弾丸がまた昇って次の雁の胸をつらぬきました。それでもどの雁も、遁げはいたしませんでした。

却って泣き叫びながらも、落ちて来る雁に随いました。

第三の弾丸が昇り、

第四の弾丸がまた昇りました。

六発の弾丸が六足の雁を傷つけまして、一ばんしま

いの小さな一足だけが、傷つかずに残つていたのでございませぬ。燃え叫ぶ六足は、悶えながら空を沈み、しまいの一足は泣いて随い、それでも雁の正しい列は、決して乱れはいたしません。

そのとき須利耶さまの愕ろきには、いつか雁がみな空を飛ぶ人の形に変わつておりました。

赤い焰に包まれて、歎き叫んで手足をもたえ、落ちて参る五人、それからしまいに只一人、完いものは可愛らしい天の子供でございました。

そして須利耶さまは、たしかにその子供に見覚えが

ございました。最初さいしよのものは、もはや地面じめんに達たつします。それは白い鬚ひげの老人ろうじんで、倒たおれて燃もえながら、骨立ほねだつた両手りょうてを合せ、須利耶さまを拜おがむようにして、切なく叫よびますのには、

（須利耶さま、須利耶さま、おねがいでございます。どうか私の孫まごをお連つれ下くださいませ。）

もちろん須利耶さまは、馳はせ寄よつて申もうされました。（いいとも、いいとも、確たしかにおれが引ひき取とつてやろう。しかし一体お前まへらは、どうしたのだ。）そのとき次々に雁かりが地面おに落おちて来きて燃もえました。大人おとなもあれば美うつく

しい瓔珞ようらくをかけた女子おなごもございました。その女子はまっかな焰ほのおに燃えながら、手をあのおしまいの子にのばし、子供は泣ないてそのまわりをはせめぐつたと申します。雁の老人が重ねて申しますには、（私共どもは天の眷属けんぞくでございます。罪つみがあつてただいままで雁の形を受けておりました。只今ただいま報むくいを果はたしました。私共は天に帰ります。ただ私の一人の孫はまだ帰れません。これはあなたとは縁えんのあるものでございます。どうぞあなたの子にしてお育てそだを願ねがいます。おねがいでございます。）と斯こうでございます。

須利耶さまが申されました。

（いいとも。すっかり判わかった。引き受けた。安心あんしんしてくれ。）

すると老人は手を擦こすって地面に頭を垂たれたと思うと、もう燃えつきて、影かげもかたちもございませんでした。須利耶さまも従弟いとこさまも鉄砲てつぱうをもったままぼんやりと立たっていられましたそうでいったい二人いっしょに夢ゆめを見たのかとも思われましたそうですがあとで従弟さまの申まされますにはその鉄砲はまだ熱あつく弾丸だんがんは減へっておりそのみんなのひざまずいた所ところの草はたしか

に倒れておったそうでございます。

そしてもちろんそこにはその童子が立っていられたのでした。須利耶さまはわれにかえって童子に向つて云われました。

（お前は今日からおれの子供だ。もう泣かないでいい。お前の前のお母さんや兄さんたちは、立派な国に昇つて行かれた。さあおいで。）

須利耶さまはごじぶんのうちへ戻られました。途中の野原は青い石でしんとして子供は泣きながら随いて参りました。

須利耶さまは奥さまとご相談で、何と名前をつけようか、三、四日お考えでございましたが、そのうち、話はもう沙車全体にひろがり、みんなは子供を雁の童子と呼びましたので、須利耶さまも仕方なくそう呼んでおいででございました。」

老人はちよつと息を切りました。私は足もとの小さな苔を見ながら、この怪しい空から落ちて赤い焰につつまれ、かなしく燃えて行く人たちの姿を、はつきりと思ひ浮べました。老人はしばらく私を見ていましたが、また語りつづけました。

「沙車さしやの春の終りおわには、野原いちめん楊やなぎの花が光つて飛とびます。遠くこおりの氷の山からは、白い何とも云いえず瞳ひとみを痛いたくするような光が、日光の中を這はつてまいます。それから果樹かじゆがちらちらゆすれ、ひばりはそらですきとおった波なみをたてます。童子どうじは早くも六つになられました。春のある夕方のこと、須利耶すりやさまは雁かりから来たお子さまをつれて、町を通つて参まいられました。葡萄ぶどういろの重おもい雲の下を、影法師かげぼうしの蝙蝠こうもりがひらひらと飛んで過すぎました。

子供らが長い棒ぼうに紐ひもをつけて、それを追おいました。

（雁の童子だ。雁の童子だ。）

子供らは棒を棄て手をつなぎ合つて大きな環になり
須利耶さま親子を囲みました。

須利耶さまは笑つておいででございました。

子供らは声を揃えていつものようにはやします。

（雁の子、雁の子雁童子、

空から須利耶におりて来た。）と斯うでござい
ます。けれども一人の子供が冗談に申しまするには、
（雁のすてごと、雁のすてごと、

春になつてもまだ居るか。）

みんなはどつと笑いましてそれからどう云うわけか
小さな石が一つ飛んで来て童子の頬を打ちました。
須利耶さまは童子をかばってみんなに申されますのに
は、

おまえたちは何をするんだ、この子供は何か悪いこ
とをしたか、冗談にも石を投げるなんていけないぞ。

子供らが叫んでばらばら走って来て童子に詫びたり
慰めたりいたしました。或る子は前掛けの衣囊から干
した無花果を出して遣ろうといたしました。

童子は初めからお了いまでにこにこ笑っておられま

した。須利耶さまもお笑いになりみんなを救ゆるして童子を連れて其処そこをはなれなさいました。

そして浅黄あさぎの瑪瑙めのうの、しずかな夕もやの中でいわれました。

（よくお前はさつき泣なかなかつたな。）その時童子はお父さまにすがりながら、

（お父さんわたしの前のおじいさんはね、からだに弾丸たまをからだに七つ持もっていたよ。）と斯こう申もうされた
と伝つたえます。」

巡礼じゆんれいの老人ろうじんは私の顔を見ました。

私もじつと老人のうるんだ眼を見あげておりました。老人はまた語りつづけました。

「また或る晩のこと童子は寝付けないでいつまでも床の上でもがきなさいました。（おつかさんねむられないうよう。）と仰つしやりまする、須利耶の奥さまは立つて行つて静かに頭を撫でておやりなさいました。童子さまの脳はもうすっかり疲れて、白い網のようになつて、ぶるぶるゆれ、その中に赤い大きな三日月が浮かんだり、そのへん一杯にぜんまいの芽のようなものが見えたり、また四角な変に柔らかな白いものが、だん

だん拵ひろがって恐ろしい大きな箱はこになつたりするのでございしました。母さまはその額ひたいが余り熱あついといつて心配しんぱいなさいました。須利耶さまは写うつしかけの経文きやうもんに、掌てを合せて立ちあがられ、それから童子さまを立たせて、
 紅革べにがわの帯おびを結むすんでやり表おもてへ連れてお出になりました。
 駅えきのどの家ももう戸を閉しめてしまつて、一面いちめんの星の下に、棟々が黒く列ならびました。その時童子はふと水の流ながれる音を聞かれました。そしてしばらく考えてから、
 （お父さん、水は夜でも流れるのですか。）とお尋ねたずねです。須利耶さまは沙漠さばくの向うむこから昇のぼつて来た大きな青

い星を眺めながらお答えなされます。

（水は夜でも流れるよ。水は夜でも昼でも、平らな所でさえなかつたら、いつまでもいつまでも流れるのだ。）
童子の脳は急にすっかり静まって、そして今度は早く母さまの処にお帰りなりとうなります。

（お父さん。もう帰ろうよ。）と申されながら須利耶さまの袂を引つ張りなさいます。お二人は家に入り、母さまが迎えなされて戸の環を嵌めておられますうちに、童子はいつかご自分の床に登って、着換えもせずにくぐつすり眠ってしまわれました。

また次のつぎのようなことも申もうします。

ある日須利耶さまは童子と食卓しょくたくにお座りすわなさいました。食品の中に、蜜みつで煮にた二つの鮎ふながございました。須利耶の奥おくさまは、一つを須利耶さまの前に置おかれ、一つを童子にお与あたえなされました。

(喰たべたくないよおつかさん。) 童子が申まされました。
(おいしいのだよ。どれ、箸はしをお貸かし。)

須利耶の奥おくさまは童子の箸はしをとって、魚を小さく碎くだきながら、(さあおあがり、おいしいよ。)と勧めすすめられます。童子は母さまの魚を碎くだく間、じつとその横顔よこがおを

見ていられたましたが、俄かに胸が変な工合に迫つてきて気の毒なような悲しいような何とも堪らなくなりました。くるつと立って鉄砲玉のように外へ走つて出られました。そしてまっ白な雲の一杯に充ちた空に向つて、大きな声で泣き出しました。まあどうしたのですしょう、と須利耶の奥さまが愕ろかれます。どうしたのだらう行つてみる、と須利耶さまも気づかわれます。そこで須利耶の奥さまは戸口にお立ちになりましたら童子はもう泣きやんで笑つていられたとそんなことも申し伝えます。

またある時、須利耶さまは童子をつれて、馬市うまいちの中を通られましたら、一疋びきの仔馬こうまが乳ちちを呑のんでおつたと申します。黒い粗布あらぬのを着きた馬商人うましやうじんが来て、仔馬を引きはなしてもう一疋の仔馬に結むすびつけ、そして黙だまってそれを引いて行こうと致いたします。母親の馬はびっくりして高く鳴きました。なれども仔馬はぐんぐん連つれて行かれます。向うの角かどを曲まがろうとして、仔馬は急いそいで後肢あとあしを一方あげて、腹はらの蠅はえを叩たたきました。

童子は母馬の茶いろな瞳ひとみを、ちらつと横眼よこめで見られましたが、俄にわかに須利耶さまにすがりついて泣き出さ

れました。けれども須利耶さまはお叱りなさいませんでした。ご自分の袖そでで童子どうじの頭をつつむようにして、馬市を通りすぎてから河岸かわぎしの青い草の上に童子を座すわらせて杏あんずの実みを出しておやりになりながら、しずかにおたずねなさいました。

（お前はさつきどうして泣ないたの。）

（だってお父さん。みんなが仔馬をむりに連つれて行くんだもの。）

（馬は仕方しかたない。もう大きくなつたからこれから独ひとりで働はたらくんだ。）

(あの馬はまだ乳を呑んでいたよ。)

(それはそばに置いてはいつまでも甘えるから仕方ない。)

(だってお父さん。みんながあのお母さんの馬にも子供の馬にもあとで荷物を一杯つけてひどい山を連れて行くんだ。それから食べ物がなくなると殺して食べてしまふんだろう。)

須利耶さまは何気ないふうで、そんな成人のようなことを云うもんじやないとは仰っしやいました。が、本統は少しその天の子供が恐ろしくもお思いでした。

と、まあそう申し伝えます。

須利耶さまは童子を十二のとき、少し離れた首都のある外道げどうの塾じゆくにお入れなさいました。

童子の母さまは、一生けん命機はたを織おつて、塾料じゆくりようや小遣こづかいやらを拵こしらえてお送りなさいました。

冬が近くて、天山はもうまっ白になり、桑くわの葉はが黄いろに枯かれてカサカサ落ちました頃ころ、ある日のこと、童子が俄にわかに帰かえつておいでです。母さまが窓まどから目敏めざとく見み付けて出て行かれました。

須利耶さまは知らないふりで写経しやきやうを続つづけておいで

す。

(まあお前は今ごろどうしたのです。)

(私、もうお母さんと一緒に働らこうと思います。勉強べんきょうしている暇ひまはないんです。)

母さまは、須利耶すりやさまのほうに気兼ねきがしながら申もうされました。

(お前はまたそんなおとなのようなことを云いって、仕方しかたないではありませんか。早く帰かえって勉強べんきょうして、立派りっぱになつて、みんなの為ためにならないとありません。)

(だつておつかさん。おつかさんの手はそんなにガサ

ガサしているのです。それなのに私の手はこんな
なんでしよう。)

(そんなことをお前が云わなくてもいいのです。誰で
も年を老れば手は荒れます。そんなことより、早く帰つ
て勉強をなさい。お前の立派になることばかり私には
楽みなんだから。お父さんがお聞きになると叱られま
すよ。ね。さあ、おいで。)と斯う申されます。

童子はしよんぼり庭から出られました。それでも、
また立ち停つてしまわれましたので、母さまも出て行
かれてもつと向うまでお連れになりました。そこは

沼地ぬまちでございました。母さまは戻ろうとしてまた（さあ、おいで早く。）と仰おほつしやつたのでした。が童子はやっぱり停とどまったまま、家の方をぼんやり見ておられますので、母さまも仕方なくまた振り返かえつて、蘆あしを一本抜ぬいて小さな笛ふえをつくり、それをお持もたせになりました。

童子どうじはやっと歩き出されました。そして、遙はるかに冷つめたい縞しまをつくる雲のこちらに、蘆あしがそよいで、やがて童子の姿すがたが、小さく小さくなつてしまわれました。俄にわかに空を羽音がして、雁かりの一行いちれつが通りました時、須利耶すりや

さまは窓まどからそれを見て、思わずどきつとなされま
した。

そうして冬に入りましたのでございます。その厳きびし
い冬が過すぎますと、まず楊やなぎの芽めが温和おとなしく光り、沙漠さばく
には砂糖水さとうみずのような陽炎かげろうが徘徊はいかいいたします。杏あんずやす
ももの白い花はなが咲さき、次ついででは木立こだちも草地さおもまっ青あおにな
り、もはや玉髓ぎよくすいの雲うみの峯みねが、四方よっぺの空そらを繞めぐる頃ころとなり
ました。

ちようどそのころ沙車さしやの町まちはずれの砂すなの中なかから、古
い沙車大寺さしやだいじのあとが掘ほり出だされたとのことございま

した。一つの壁がまだそのままで見附けられ、そこには三人の天童子が描かれ、ことにその一人はまるで生きたようだとみんなが評判しましたそうです。或るよく晴れた日、須利耶さまは都に出られ、童子の師匠を訪ねて色々礼を述べ、また三巻の粗布を贈り、それから半日、童子を連れて歩きたいと申されました。

お二人は雑沓の通りを過ぎて行かれました。

須利耶さまが歩きながら、何気なく云われますには、

(どうだ、今日の空の碧いことは、お前がたの年は、丁度今あのそらへ飛びあがろうとして羽をばたばた云

わせているようなものだ。）

童子どうじが大へんに沈しずんで答えられました。

（お父さん。私はお父さんとはなれてどこへも行きたくありません。）

須利耶すりやさまはお笑わらいになりました。

（勿論もちろんだ。この人の大きな旅たびでは、自分だけひとり遠い光の空へ飛び去さることはいけないのだ。）

（いいえ、お父さん。私はどこへも行きたくありません。そして誰だれもどこへも行かないでいいのでしようか。）
とこう云う不思議ふしぎなお尋ねたずねでございます。

（誰もどこへも行かないでいいかってどう云うことだ。）

（誰もね、ひとりで離れてどこへも行かないでいいのでしようか。）

（うん。それは行かないでいいだろう。）と須利耶さまは何の気もなくぼんやりと斯うお答えでした。

そしてお二人は町の広場を通り抜けて、だんだん郊外こうがいに来られました。沙すながずうつとひろがつておりました。その砂すなが一ところ深く掘ほられて、沢山たくさんの人がその中に立ってございました。お二人も下りて行かれた

のです。そこに古い一つの壁かべがありました。色はあせてはいましたが、三人の天の童子たちがかいてございました。須利耶さまは思わずどきつとなりました。何か大きい重いものおもが、遠くの空からぱったりかぶさつたように思われましたのです。それでも何気なく申もうされませんには、

（なるほど立派りっぱなもんだ。あまりよく出来てなんだか恐こわいようだ。この天童てんどうはどこかお前に肖にているよ。）

須利耶すりやさまは童子どうじをふりかえりました。そしたら童子はなんだかわらつたまま、倒たおれかかっているらし

た。須利耶さまは愕おどろいて急いそいで抱だき留とめられました。童子はお父さんの腕うでの中で夢ゆめのようにつぶやかれました。

（おじいさんがお迎むかいをよこしたのです。）

須利耶さまは急いそいで叫さけばれました。

（お前まへどうしたのだ。どこへも行いってはいけなよ。）

童子が微かすかに云いわれました。

（お父さん。お許ゆるし下さい。私はあなたの子です。この壁かべは前まへにお父さんが書いたのです。そのとき私は王わうの……だったのですがこの絵ができてから王さまは殺ころ

されわたくしどもはいっしよに出家しゅっけしたのでしたが敵王てきおうがきて寺を焼やくとき二日ほど俗服ぞくふくを着きてかくれているうちわたくしは恋人こいびとがあつてこのまま出家にかえるのをやめようかと思つたのです。）

人々あつまが集つて口々に叫びました。

（雁かりの童子だ。雁の童子だ。）

童子はも一度いちど、少し唇くちびるをうごかして、何かつぶやいたようでした。が、須利耶さまはもうそれをお聞きとりなさらなかつたと申もうします。

私の知つておりますのはただこれだけでございま

す。」

老人ろうじんはもう行かなければならないようでした。私はほんとうに名残りなご惜しく思おい、まっすぐに立たつて合掌がつしようして申しました。

「尊とうといお物語ものがたりをありがとうございました。まことにお互たがい、ちよつと沙漠さばくのへりの泉いずみで、お眼めにかかつて、ただ一時いっしょを、一緒いっしょに過すごしたただけではございますが、これもかりそめのことではないと存ぞんじます。ほんの通りかかりの二人たびびとの旅人たびびととは見えますが、実じつはお互たががどんなものかもよくわからないのでございます。いずれ

はもろともに、善逝スガタの示しめされた光の道を進すすみ、かの無上菩提むじょうぼだいに至いたることとでございます。それではお別わかれいたします。さようなら。」

老人は、黙だまって礼れいを返かえしました。何か云いいたいようでした。黙だまって俄にわかに向むこうを向むき、今まで私の来きた方の荒地あれちにとぼとぼ歩き出でしました。私もまた、丁度ちやうどその反対はんたいの方かたの、さびしい石原を合掌がっしょうしたまま進すすみました。

底本…「インドラの網」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月20日再版

底本の親本…「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月発行

入力…浜野智

校正…浜野智

1999年7月26日公開

2007年8月3日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。